

歌舞伎と深川⑤

深川情緒と「深川物」

江東区深川江戸資料館

隅田川の東岸に位置し、江戸の新開地として開発された深川は地域的には江戸の範囲でありながら、深川独特の情緒、風景を生み出しました。江戸の中心部と異なり、江戸の郊外として境界地であった深川は光と影の部分の内在する地でもあり、そこに生きる人々や風俗、風景は歌舞伎の舞台として様々に描かれました。

今回は歌舞伎に取り上げられた、富岡八幡宮をはじめとする深川の代表的な風景・風俗と、歌舞伎の「深川物」の成立を見ていきます。

1. 深川情緒を^{はぐく}育んだもの

深川の人々は、日本橋や神田などの江戸の中心部へ行くことを「江戸に行く」といい、同じ江戸の範囲にありながら、深川を「江戸とは異なる地」として認識し、この土地ならではの風景や風俗を生み出し、誇りしました。

(1) 水の町

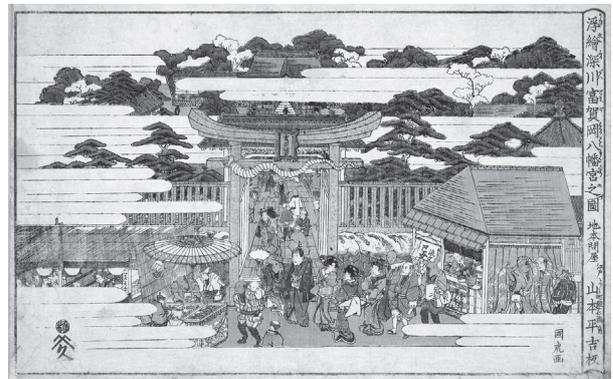
獵師町として江戸初期に成立した深川は、西に隅田川、東に中川、南に江戸湾。さらに木場や江戸の物流を支える倉庫街に続く大小の川や掘割、そこを行き交う船や橋の往来など、「水の町」でした。水運の大動脈としての側面だけでなく、永代橋から望む江戸湾や富士、また洲崎の初日の出や潮干狩りなど、風光明媚な景勝の地でもありました。

(2) 信仰と行楽の地

深川は富岡八幡宮の門前町として発展しました。富岡八幡宮は寛永4年(1627)に社殿が竣工し、水・海神を中心に祀ります。明暦の大火(1657)後、幕府による本所深川の開発の一環として、元禄11年(1698)永代橋が架橋され、江戸市中から深川への入口となった富岡八幡宮周辺は深川の信仰と行楽の中心地として賑わいました。

(3) 岡場所の形成

富岡八幡宮の門前町には平清、二軒茶屋などの有名な料理茶屋が立ち並び、その周辺には岡場所が形



「浮世深川富岡八幡宮之図」歌川国虎画
江東区教育委員会蔵

成されました。岡場所とは幕府公認の遊里である吉原とは異なり非公認のもので、江戸の新開地である深川に多くの人々を呼び込むための大きな要素となりました。安永年間(1772～1781)には品川、内藤新宿をはじめ、190ヶ所の岡場所が江戸中にありましたが、その筆頭が深川でした。幕府の制度内にある吉原に対し、深川は自由な空気にあふれていたことが大きな特色です。

深川の岡場所を代表するのは「辰巳芸者」です。深川は芸を重んじ男まさりで気風が良く、素人らしさのある自然体で力強い女性たちを重んじました。その姿は為永春水の人情本「春色辰巳園」の仇吉、米八をはじめとして、いきで人情味にあふれる女性たちの生き様が多くの作品に描かれています。

(4) いきと深川

「いき」は江戸の町で生まれた美意識です。当初は髪型や衣装などの身なりを指す言葉でしたが、深川では外観だけでなく心情などの内面も含めて「いき」を表現しました。文化から天保の頃(1804～1844)にかけて深川は江戸を代表する流行の発信地となり、様々な文化を生み出しました。この要素は岡場所だけでなく、江戸前の魚介類を採る獵師町、水面の風を切る船頭、木場で材木を扱う川並などの、迅速に働きながらも、心持ちを大切に深川の風土と人々が生み出した情緒であるといえます。

2. 初代並木五瓶と「深川物」

はじめて深川が歌舞伎に描かれたのは、寛文3年(1663)古日向太夫芝居で上演された「深川詣で」といわれます。富岡八幡宮の参詣の様子を描いたものでした。これ以降、様々な狂言作者が深川を舞台に描いた「深川物」を生み出しました。

(1) 上方と江戸の融合

初代並木五瓶(延享4年<1747>~文化5年<1808>)は上方を代表する人気狂言作者です。寛政6年(1794)三代目澤村宗十郎と共に江戸に下る時の都座との契約金は座頭役者と同額の300両と言われ、江戸歌舞伎界の期待を一身に背負っての下向でした。

上方での五瓶は、代表作である「金門五三桐」をはじめとした時代物を多く手掛けました。しかし江戸では心機一転し、上方の人気狂言を江戸に置き換えた世話物狂言を生み出し、江戸でも立作者としての地位を確立しました。五瓶は理知的なものを好む上方と、情緒的な物を好む江戸の風土と観客のニーズを的確にとらえ、両方の側面を持つ狂言を作る大きな足跡を残しました。五瓶は特に江戸の中でも深川独特の情緒に大きな関心を持ち、上方の人気狂言を深川を舞台にアレンジした「深川物」を生み出しました。また五瓶は深川ともゆかり深く、初代から三代までの五瓶の墓は、正覚院(三好1-7-7)にありました。

(2) はじめての「深川物」

五瓶が江戸に下り、はじめて大当たりをとったものは上方での人気狂言を深川を舞台に置き換えた「五大力恋緘」です。寛政6年(1794)大坂・中山与三郎座初演「島廻戯聞書」の三つ目以下を独立させたものです。元文2年(1737)大坂曾根崎新地の芸子・菊野が殺された五人斬り事件に取材した狂

言です。五瓶はヒロインの名を深川芸者・小万、曾根崎の茶屋を深川の料理茶屋とし、また木場の風景も描きました。この狂言は、約70日間大入りとなる大評判を呼びました。その後、四世鶴屋南北作「盟三五大切」、河竹黙阿弥作「八幡祭小望夜賑」をはじめ多くの作品にアレンジされました。

(3) 「深川物」の最高傑作

五瓶の深川物の中で、最も深川の風俗や風景を生き生きと描いた傑作とされるのが、寛政10年(1798)正月、江戸桐座初演の「富岡恋山開」です。上方の歌謡、小説、歌舞伎などに取り上げられた三国小女郎と玉屋新兵衛、出村新兵衛の二人新兵衛が小女郎を張り合う内容です。深川仲町の茶屋・梅本、また3月の深川の風物詩であった富岡八幡宮の山開きなどを舞台に、いきな深川らしい気風が良く義理と人情に厚い人々の生き様を描いています。この狂言は江戸と上方両方で脚色され、再演されました。

このように、歌舞伎は深川の代表的な名所である富岡八幡宮をはじめとする深川の「光」、さらに料理茶屋や遊里という「影」、また「光」と「影」の両面を映す「水」など、深川の様々な風景を描き、数々の深川物の舞台となりました。さらに五瓶の狂言の特色である合理的な写実性、道具を活かした舞台演出などもその後に続く四世南北や黙阿弥をはじめ、多くの狂言作者に影響を与え、江戸の生世話物誕生の礎となりました。

(主な参考文献)

深川区史編纂会編『江戸深川情緒の研究』

(有峰書店/1971)

高田衛・吉原健一郎編『深川文化史の研究・上』

(江東区/1987)

竹内誠『江戸社会史の研究』(弘文堂/2010)



「富岡恋山開」歌川豊国画(三代) 安政4年(1857) 早稲田大学演劇博物館蔵